

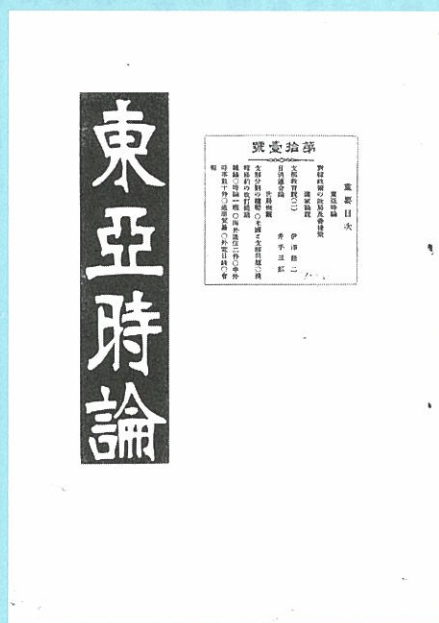
日清戦後の中国をめぐる日本の方策
——
民間人、ジャーナリスト、学者等々の
多様な論説や考察を掲載。

◆監修◆ 有山輝雄
東京経済大学教授

◆解題◆ 加藤祐三
都留文科大学学長
横浜市立大学名誉教授・元学長

◆編集◆ 高木宏治
陸羯南研究会

東亞時論



全3巻

ゆまに
書房 YUMANI
SHOBUN

『東亜時論』復刻にあたって

有山輝雄

雑誌『東亜時論』は、一八九八（明治三二）年二月から翌一八九九年二月二十五日までの一年間しか続かなかった短命の雑誌である。東亜同文会の機関誌であったが、東亜同文会そのものは、一八九八（明治三二）年一月二日に設立され、一八九六（昭和二二）年三月に解散するまで四十六年も続いたのであるから、『東亜時論』は東亜同文会自体の長い歴史のなかでごく短期だけ機関誌としての役割をはたしただけである。

しかし、この一九世紀最末期は、近代日本の対外関係、なかんずく対中国関係にとってきわめて重要な時期であった。西欧列強が中国大陸主要地に次々と利権を獲得し、一方では戊戌変法とその失敗による政治混乱という激変に対し、日本は主體的対応策をなかなか見いだすことができなかった。いうまでもなく、こうした東アジアの激変をもたらしのは、日清戦争であったのだが、その時点では戦勝の熱狂と三国干渉への憤慨によって日清戦争が東アジアあるいは日本に何をもたらしたのかははっきり見えていなかったのである。

こうした状況において東アジア状況に対して積極的に考究し行動しようとして生まれたのが東亜同文会である。しかし、多彩な人物が結集しただけに、必ずしも一貫した方向を提示できたわけではない。一例をあげれば、創刊号には近衛篤磨の論文とともに康有為、梁啓超の文章を掲載し、康らへの同情を表しているにもかかわらず、第三号には陸羯南が「社交上の日清」を書き、事実上康有為、梁啓超らへの縁切りを宣言している。恐らく羯南の論文は近衛の意向を体していたのであろう。それ以外にも中国認識、中国政策で互いに食い違ったり、一貫性のない記事が掲載されている

例はある。むしろ、「支那保全」といったスローガンに掲げながら、その議論にかなり幅があり、また時間の経過とともに揺れ動いていったのが、東亜同文会の特徴と見るべきなのである。

そして、中国観が揺れ動きあるいは変化しているのは東亜同文会に限らず近代日本の政財界人・知識人一般に見られることであつたから、『東亜時論』はその揺れや変化のあり方を考えるうえで絶好の資料となっているのである。

また『東亜時論』のもう一つの大きな特徴は、中国、朝鮮半島の動向に関する情報の詳細である。その視野は、欧州列強の東アジア政策にまでおよんでいる。しかも、半月刊という刊行周期からして速報性ももっている。当時、日本の通信社・新聞社の海外情報入手ルートは限られていたから、『東亜時論』の情報収集は他のメディアを上まわっていた。

雑誌掲載の情報は、海外メディアからの転載も多いが、それだけでなく現地会員からの通信など東亜同文会の組織によって独自に集めた情報が数多い。これら情報は、東亜同文会会員に限らず、多方面の人々の中国認識の基礎になったことは間違いない。中国認識がいかにして形成されたのか考えるうえで得がたい資料となっているのである。

一八九九年の『警視庁統計書』から算出すると平均発行部数は三四九六、東京府下一八六六（五三％）、他府県一五七四（四五％）、海外五五（一％）である。無論、官庁統計の数字の信憑性には問題はあるが、政教社の雑誌『日本人』の一回平均部数は約一八〇〇であるから、意外に多いといえる。これら読者層と影響の広がりも今後の研究課題であらう。

現在、日本の中国、朝鮮との関係研究は複層なものとしてとらえることが求められているのだが、『東亜時論』復刻版はその貴重な材料を提供するはずである。（東京経済大学教授）

『東亜時論』の内容は、日本の大陸政策や同時代の国際情勢を論評した「東亜時論」、「時論」、「世局概観」等の批評類と、中国や朝鮮等の時事的なニュースを紹介する「海外通信」（中国在住会員からの報告）、「中外時事」等から構成されている。前者の記事をいくつか紹介すれば、日清戦争後における朝鮮政策に対する批判、英露協商の中国に与える影響への意見等、山県内閣時代における民間人の外交議論を窺うことができる。また、後者に関しては、西太后や李鴻章らの動向を報道しており、これにより、戊戌変法から義和団事件へと至る近代中国政治史上の緊迫した流れを追うことができる。また、中国や朝鮮半島各地で発生した事件、例えば、新疆カシュガル地方におけるロシア軍と清国軍との紛争や、北京鉄道におけるイギリス人技師の解雇問題等についての解説が附せられている。こうした情報は、現在の中国においても公開が不十分であり、また、現存の文献から確認することも難しいため、日本外務省、清国の総理各国事務衙門、イギリス外務省等の各史料を解釈する際に有効な補助材料になると思われる。

さらに、本誌には、国際な経済問題を扱う「通商貿易」の欄、アジアに限らず欧米の情報を速報する「外電日録」などの欄があり、本誌の多様な面をうかがわせる。

【東亜同文会】東亜同文会は、一八九八（明治三二）年十一月、近衛篤磨が会長であった同文会と、陸羯南、三宅雪嶺、池辺三山らの東亜会との合同によって誕生した。同会の方針は、清国に対する外国の内政干渉を排除して、「支那の保全」を実現することにあつた。一九〇一（明治三十四）年、同会は、上海に東亜同文書院を設立し、多くの人材を輩出する。一九四六年（昭和二十二年）三月に解散するまで、東亜同文会の活動は続いた。

【東亜時論】東亜同文会はその方針に基づき、清国の保全、清国の開発、国情の考查、国論の喚起の四大目標を掲げ、その具体的な活動を支える機関誌として発行したのが、本誌『東亜時論』である。『東亜時論』は一八九八年十二月に第一号を発刊後、月に二回のペースで二八九九年十二月まで全二十六号が発刊された。その後、同会の機関誌は『東亜同文会報告』（一九〇〇（明治三十三）年四月～一九一〇（明治四十三）年六月）、『東亜同文会支那調査報告書』（一九一〇（明治四十三）年七月～一九一一年（明治四十四）年十二月）と題名を変えながら継承され、最終的には『支那』（一九二一年（明治四十五年）～一九四五（昭和二十一年一月）に引き継がれ、太平洋戦争末期まで発行は継続された。

本書の特色

●所蔵機関が極めて少ない、東亜同文
会設立直後の一年間の機関誌『東亜
時論』(全二十六冊)を復刻。

●日清戦争後の中国やアジアをめぐる
情勢と、それに対する日本の方策に
ついて、近衛篤磨、梁啓超、陸羯南、
池辺三山、内藤湖南、笹森儀助、奥村
五百子など民間人、ジャーナリスト、
学者らの多様な論説や考察を掲載。

●中国や朝鮮各地の記事、現地会員か
らの報告や、通商貿易に関する記事、
欧米からの外電など、豊富な情報も
掲載。

●解題として加藤祐三「東亜時論」(小島
麗逸編『戦前の中国時論誌研究』一九七八所
収)を収録。また、原本に忠実な総目
次を付す。

本文見本

65%に縮小してあります

東亜時論 第拾壹號

時論

對韓政策の敗局及善後策

近時支那の形勢漸く切迫し、瓜分の機微、將に成らんとするや、我國人の眼光は、一に支那問題に向つて注射し殆んど朝鮮問題を忘却せんとするものゝ似たり、朝鮮問題意識却つてきまのなるや。蓋し來て二十世紀に於ける世界政變の大舞臺は、固より支那に在り、支那の盛衰興廢は即ち東亞大局の盛衰興廢に關すること、固より論を俟たずと雖も、我國の地位よりして支那問題を解決せんと欲は、朝鮮問題を解決すること、益必要なり。抑我國が支那問題の解決に着手するに於て、或は北京政府を提擧して其變法自強を促し、或は南支那地方の人士を誘接して其革新運動を鼓舞し、或は之が教師となり、或は之が友侶となり、以て其内部より自新自強を助くると、固より我國人の責務なりと雖も、苟くも支那を保全し、東亞の大局を恢復せんと欲せば、決して此一手段のみを採守すべからず、何ぞなれば支那の盛衰興廢は支那自らの決し得る問題に非ずして、今や既に瓜分の形勢將に成らんとするものあればなり。故に支那問題を解決せんとせば、必ずや支那を環繞して瓜分を企てつゝある所の列強に對する覺悟なかるべからず。支那の瓜分や、固より旦夕の間に行はるべしといふべからざるも、支那の自ら樹立する能はざる、勢、瓜分形勢を馴致し、列強をして各其鷄鳴の技圖を逞くせしむるに至るも、知るべからず。事若し此に至らば、我國人たる者果して何を以て之に應ずべき乎、支那政府若くは人民と聯合して以て列強に當るべき乎、將た假りに支那の復活すべき望みある地方を著く我が勢力の下に置き、餘りに其扶植再造を助くべき乎、是れ固より膠柱の方針を執るべきに非ず。唯夫れ今日に於て、我々能く一一定の方針は、將來形勢の如何に拘はらず。可成我が勢

時論 對韓政策の敗局及善後策

東亜時論第拾壹號目次

- 東亜時論 對韓政策の敗局及善後策 伊澤修二
- 諸家論説 井手三郎
- 支那教育概説
- 日清通商論
- 世局概観 支那分省の趨勢○米國と支那問題○清韓條約の改訂提議
- 雜錄 東亞に於ける最近政治經濟上の發達○膠州事情
- 時論一斑 北滿信○釜山通信
- 海外通信
- 中外時事 九龍事件○沂州事件の成行○金州殺人事件の清韓談判○佛國清廷に迫る○西部支那の不穩○廈門專署居留地に付法人の不平○蘇州事件全く終了○遼東に於ける德國の苛政○獨逸公使の更迭○北洋艦隊組織の計畫○武昌城外の砲臺○黄河改修工事附り李鴻章の辭職○膠州清韓の現狀○清國條約締結人口及船舶出入數○清國難事數十件
- 清韓條約締結の延引○伏魔殿の時令附り皇后崩立問題○歷王退尊の謬○平壤居留地變更の抗議○木浦海軍造艦談判結了○露公使の献金○韓國難事數十件
- 英露協商の調印○米國と比律賓○伊國と沙門灣○英國と威海衛○佛國代議員の英佛和親説○白粉の支那禁○平和會議の撤兵案○外に世界時事數件

發行所

東京市神田區一ツ橋通町廿一番地
東亜同文會
發行兼編輯人 松岡又五郎
印刷人 大原信
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
會社秀英舍
東京市神田區一ツ橋通町廿一番地
表神保町 東京 堂

明治三十二年五月九日印刷
明治三十二年五月十日發行

我外務省吏員の移動○海外渡航者數○清國に逃れたる臺灣土匪の動靜○釜山沿岸測量繼續○韓國守備隊交代日取○日華學堂の近況○成城學校に於ける清國學生○鳥取の支那語學校
●通商貿易
●外電日録
●會報
發行日 毎月二回 十日 二十五日
定価 一冊金拾圓 十冊金拾圓 四十冊金拾圓 六十冊金拾圓 八十冊金拾圓 一百冊金拾圓
●郵部不買○郵費代用不買○但書又は五厘の事
●廣告料 一頁二十字拾金拾圓 半頁十圓 一頁八圓

東亜時論

全3巻

[監修] 有山輝雄 [解題] 加藤祐三 [編集] 高木宏治

A5判上製/函入

全3巻●揃定価63,000円(揃本体60,000円)

ISBN978-4-8433-3421-8 C3321 2010年7月刊行

東亜同文会の機関誌『東亜時論』を復刻。同会は、20世紀前半、中国を中心とした、日本とアジアとの交流・政策の一翼を担った民間団体で、その設立直後の一年間に発行された全26号(全26冊 1898年12月～1899年12月)を収録。東アジア、特に対中国政策や文化交流等にかかわる民間団体の設立当初における活動を伝える雑誌史料であり、陸羯南ほかの未刊論説を多数掲載した希少文献でもある。

全3巻の構成

- ◆第1巻 第1号～第9号 定価21,000円(揃本体20,000円) ISBN978-4-8433-3422-5
- ◆第2巻 第10号～第18号 定価21,000円(揃本体20,000円) ISBN978-4-8433-3423-2
- ◆第3巻 第19号～第26号/解題・総目次 定価21,000円(揃本体20,000円) ISBN978-4-8433-3424-9

関連企画のご案内

日本画報 一付・『日露戦時旬報』

[監修] 有山輝雄 [編集・解題] 高木宏治 全2巻
新聞『日本』の付録『日本画報』全42号を復刻。政論紙『日本』が脱皮を図ろうとしたグラフ紙であり、写真印刷技術のさきがけとしても重要。●揃定価73,500円(本体70,000円・分売不可)

新聞『日本』附録 明治中期分県地図

一付・中国/朝鮮/露西亞—
[監修] 清水靖夫/有山輝雄 [編集・解題] 高木宏治 新聞『日本』の明治34年～同36年にかけての附録。各県別の地図をその裏面の「重要統計」と共に収録。●定価72,450円(本体69,000円)

大陸新報 *紀伊國屋書店専売商品

[監修] 金丸裕一 35mmマイクロフィルム 全23リール+別巻2巻
1939年～1945年の戦況、経済、時事、文学等の日中両国の文化動向をも詳細に記録。上海をはじめとした華中地域における、数少ない邦字新聞資料。●揃定価1,078,350円(本体1,027,000円)

朝日新聞外地版

[監修・編集] 坂本悠一 全65巻・別巻1
昭和10年12月1日から同20年までの外地の地方版(朝日新聞西部本社所蔵)を集成。朝鮮、満洲、中国、台湾などの各版ごとを年代別に編纂収録。●最多価格:各36,750円(本体35,000円)

陸羯南 日本 全81リール

[監修] 北根 豊 35mmマイクロフィルム版
「国民主義」を標榜して正論を掲げ、明治政府から度重なる弾圧を蒙りながらも最後まで抵抗した我国唯一の政論新聞「日本」をマイクロ化。●揃定価1,365,000円(本体1,300,000円・分売不可)

植民地帝国人物叢書 朝鮮編

[編集] 永島広紀 全20巻
旧植民地の統治機関のトップをはじめ、官僚、実業家、さらに現地出身者も含め、伝記を復刻。各地域毎に気鋭の若手研究者が編集。●揃定価380,100円(本体362,000円)

植民地帝国人物叢書 台湾編

[編集] 谷ヶ城秀吉 全19巻
旧植民地の統治機関のトップをはじめ、官僚、実業家、さらに現地出身者も含め、伝記を復刻。各地域毎に気鋭の若手研究者が編集。●揃定価309,750円(本体295,000円)

満洲グラフ

[監修] 財団法人 満鉄会 全15巻
1933年に南満洲鉄道株式会社(満鉄)が創刊したグラフPR誌。極めて多彩な内容を斬新なレイアウトで構成。まさに写真で見る「満洲国百科」的内容。●揃定価346,500円(本体330,000円)



〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL .03 (5296) 0491
FAX.03 (5296) 0493
<http://www.yumani.co.jp/>
e-mail eigyou@yumani.co.jp

●特におすすめしたい方● 大学図書館、日本近代史・中国近代史・日中関係史・アジア史・植民地史の研究者、関係研究機関など。

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日		※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。	
ご注文書	東亜時論 全3巻 定価63,000円(揃本体60,000円) ISBN978-4-8433-3421-8 C3321		取扱店
	セット		
	お名前		
ご住所	TEL ()		10.07/01.7000.H